
花咲くいろは-My Hands Future-

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花咲くいろは - My Hands Future -

【Nコード】

N8463X

【作者名】

伝説・改

【あらすじ】

引きこもりである高校2年生の日高飛鳥。

そんな彼に痺れを切らした父親は、高校を中退させて無理矢理とある旅館へと働かせる。

無気力、自堕落な彼はこの旅館で自分を変える事が出来るのか？

そして、彼の未来に待つモノとは……？

花咲くいろはのオリジナル主人公青春ドタバタ旅館コメディ！

recette0「人は時々心を鬼にしてみなきゃいけない事がある」

鼻につく、心地よいクリーム香り。

スポンジケーキの匂い。

俺は、この匂いが大好きだ。

カシヤカシヤとクリームをボウルの中で混ぜる時の音。

この音も、俺は大好きだ。

子供のころからそうだった。

甘い匂いのするケーキ。

サクツとしたクッキー。

フルーツののったタルト。

山の様に果物やクリームの置かれたパフェ。

柔らかい羊羹。

ふわふわだけでももちもちな饅頭。

これが俺の生きがい。

これがあるから、俺はきつと生まれてきたんだ。

これが、俺の生まれた意味。

そう。

会社で働く。

学校へ行く。

そんなもの、俺は望んでいなかった。

ただこの甘いもの。

お菓子のお為だけに、生まれたんだ。

だから。

それを今俺の目の前で全否定するこの親父だけは、死ぬほど嫌いだった。

「お前、今日も学校へ行かなかったんだな」

「だったらなんだよ。今さら。何日ぶりだっけ、帰って来たの。…
…ああ、何週間の間違いか」

親父のあの眼光。

怖いもんか。あんなもの、もう何年も見てきた。今さら怖がる必要がどこにあるんだ。

「……そんな口、よく叩けるものだな。お前の様な『落ちこぼれ』が」

「ッ！……そんな落ちこぼれにしたのは、どこのどいつだよ！！」

「人のせいにするな。自分が犯した過ちだろう」

「うるさい！早く出て行けよ！！」

「悪いがここは私の家だ。この部屋も、『お前に貸している』だけだ。つまり、どうこうしようが私に最終決定権がある」

無表情に、そんな言葉を平然と言う。

これもいつもの事だ。今さら怖がるかよ。

「……話を変えよう。受け取れ」

親父は鞆から、一通の封筒を取り出し、俺に放り投げた。

目の前に落ちた封筒を拾い上げると、中から小銭がぶつかる音が。

「……なんだよ、これ」

「お前の明日から住む場所だ」

「……どう意味だよ」

「そのままだ。早く荷物をまとめて出て行け」

こればかりは、怖かった。

出て行け？

……今さらだけど、なんで今こんな事を？

「何言ってるんだよ。今さら。育児放棄かよ」

「今まで散々親の扱いをしていなかったくせに、お前こそこんなときだけ親権など。都合のいい奴が」

凶星だった。

だからこそ、俺の心は徐々に温度が急上昇していった。

「知るかよ！……なんで、出ていくんだよ」

「決まっているだろう。お前が恥さらしだからだ」

「ッ……」

「貴様のせいで、今どれだけ私の仕事が大変な事になっているのか分かってるのか？」

貴様のせいで、母さんがどれだけ近所から白い目を向けられているのか分かってるのか？」

「知らねえよ！俺のせいにすんじゃねえよ！」

「ふん……言葉も通じないか。学校に行っていないのだから仕方ないか」

そろそろ本気で殺そうだった。

今すぐ大声を上げてあの太い首を絞めて、絞殺してやりたかった。でも出来ない。

……事実、なんだから。

第一、俺にはそんな勇気なかった。

「……そう言う事だ。早く荷物をまとめてとっとと出て行け」

——この面汚しが。

そう吐き捨て、俺の部屋を後にした。

俺はただ、茫然とベッドに座りこんでいるしかなかった。

時間が経って、精神的に少し落ち着いたのか。

肺に溜まった息を吐き、茶封筒を手に取り、中身を確認した。
中に入っていたのは行きの新幹線のチケットと後の電車代や食費。
そして住所らしき物が書かれたメモ用紙だった。

「なんだ、ここ？」

メモ用紙には『喜翠荘』と大きく書かれていた。

……旅館、の名前か。

時計を見ると、夜中の3時。

どうせ、ここにはもういられない。

必要な衣類や私物をリュックサックと旅行用のキャリーケースに入れる。

……そして、もう使わなくなった菓子作りの器具の数々。

まだ学校へ行っている頃に、自分の小遣いで買ったものだ。

「……」

——美味しー！さっすがあーちゃん！

……くそ。

ここに置いて行く事は出来なかった。

気がつけば、全部鞆の中に入れていた。

「飛鳥……」

玄関で靴を履いて、いざ出ようとした時。
寝間着姿の母親が、俺を引きとめた。

「なんだよ」

「私がちゃんとお父さん説得するから、ね？こんな事……」

「うるさいっ！俺はもうこんな所いたくねえんだよ！！」

そうやって言うと、顔をうつむけて黙りこむ。

「……ごめん、でも、俺はもうあんな奴といっしょに暮らしたくない」

「でも、お父さんは何も知らないから……」

「あんな事言っても、何にも変わんねえよ」

それに……もう、思い出したくないんだ。

そう言い残し、16年間過ごした家と別れを告げた。

揺られ、揺れ。

気づいたころには、俺はもう新幹線の中にいた。

あんな性格の歪んだクソジジイとも会わなくていい。
友達もいない。

何一つ、思い残す事なんてなかった。

やがて、暗闇のトンネルを抜けると、たくさんの緑が窓から見える外を眺めている俺の視界を包む。

……そうか、もうそろそろ着くんだな。

ヘッドホンから聞こえる音楽は、レッツパーティと叫んでいた。

そう、これが始まり。

俺の——日高飛鳥の人生を変える、運命の分岐点^{ターニングポイント}だった。

登場人物紹介

名前：日高 飛鳥 ひだか あすか

詳細：本作の主人公。

自己中心・自堕落・我儘の三拍子そろった性格。

とある事情で引きこもりになっており、友達と言える人物もいない。

自分中心の考え方が目立ち、気に入らない事があればなんだろうと突っかかる。口も非常に悪い。

呆れるほど自己中心的だが、その中でも優しく気遣いを見せる時がある。

何かと癖の強い喜翠荘の面々の中では比較的良識人で（飛鳥も十分癖は強いが）ツツコミ役に回る事が多い。

頭の回転が速く、勉強してないだけで物分かりは非常に良い。

イメージCV：鈴木千尋

『テイルズオブジァビス』ルーク・フォン・ファブレ役

『エルフェンリート』コウタ役

名前：日高 明日之 ひだか あすの

詳細：飛鳥の父親。

エリート雑誌社の重役で、常に仕事で家を開けている。

自分より劣化していると思う人間はとことん下に見る性格。

イメージCV：井上和彦

『美味しんぼ』山岡士郎役

『名探偵コナン』白鳥任三郎役

名前：日高 保香ほつか

詳細：飛鳥の母親。

元旅行編集部の編集者で、現在は主婦をしている。
引きこもりになった飛鳥を心配している。

イメージCV：甲斐田裕子

『銀魂』月詠役

『一騎当千』呂蒙子明役

recipe1「女の子の類は簡単に叩くな」

喜翠荘。

石川にある普通の旅館みたいだけど、そんな所になんでクソジジイは俺を働かせにいかせたのか。

そもそも、俺はこれからそこで住み込みなのか？

それともこの辺に親戚……はいないか。聞いた事ない。

なんにしろ、こんな所に行かされて俺はやはり苛立ちを隠せない。

そりゃそうだ。今までバイトもした事のない俺が、旅館だなんて接客業、出来るわけがない。

「……やりたくねえ」

そうは言うが、電車は無情にも目的地へ向かっている。

途中で飛び降りるわけにはいかない。落ちたら死にそうだし。どっかの借金執事みたいに体頑丈じゃないし。

ヘッドホンから聞こえる音楽がそろそろ15回ほどのループに入ると同時に、目的地に到着した事を告げるアナウンスが聞こえる。

……マジで行きたくなえ。

電車を降りて、重い足取りでホーム——と、言えいいか。

どうやらこの駅はよく見る田舎の駅で、ホームには屋根も何もないなんともまあ……あれな感じの駅だ。

切符を改札口の機械……おお、ここだけは都会っぽいな。機械に通してとつと駅から出る。

衣服やゲーム、漫画が入ったりリュックサックを背負い直し、後は歩き。

石でできた道や左右に並ぶ店を見て回りながら、ゆっくりゆっくり俺の脚は喜翠荘へと向かって行った。

流石温泉街。結構にぎわってるんだな。

……にしても……。

「はあ……はあ……」

坂道がきつすぎる……。

外に出たのが何力月ぶりだからか、眩しすぎる日光とこの坂道が容赦なく俺の体力を削っていく。

「くそ、行ってやってるんだから迎えぐらい寄こせよ……！」

こっちは東京の桜が丘からわざわざ行ってやってるのに……。

なんだよ、女将だかなんだか、とりあえず上の奴には文句言わねえと気が済まない。

そうこうしているうちに、ようやくその喜翠荘らしきところにたどり着いた。ひええ……長かった。

俺は目の前に立っている旅館を見て、率直に言う。

「……普通」

来るまで色々旅館を見たが、なんかあまりにも普通すぎる。
こんなところで働くのかよ。もっと良い所で働かせろよ。まあ働くのなんて嫌だけどさ。
長い髪をポリポリ掻きながら、とりあえず中へと入る事にした。

「アンタは今日からうちの従業員だ」

一発目からそれかよ。

目の前の煙管を吸っている婆——この女将である四十万スイが普通にそう言う。

ここまで御苦労さま、今日はゆっくりしな。……なんて言葉が出るかと思えばこれかよ。

何様のつもりだよ、この婆。

「……なあ、本当に俺ここで働くのかよ」

「嫌ならいいさ。こつちもそこまで余裕があるわけじゃない」

ちっ。

なら働かせんじゃねえよ……。

「ただ、他に行く場所なんてアンタには無いんだろう?」

「……まあ」

事実だった。

親戚なんて今まで会った事ないし、友人もない俺にはどこにも行くあてが無かった。

自動的に俺はやっぱりここで働くしかない。

……なんでこんな所に。

「高校卒業するまで面倒みてやる。その後は好きにしな。働いた分だけ金はやる」

そりゃそうしてもらわないと困るぞ。

ただ働きなんてしない方がマシだ。

そもそも、働きたくなんかないし。

「……まあ、分かったよ。何すりゃいいんだ?」

「ほれ」

そう言われ、この婆は俺に緑色のジャージとかバケツとかぶん投げてきて、俺はギリギリでキャッチする。

なんだよ、これ。

「さっさとそれ着て掃除しな。こっちの方は他の新人にやらせてるから、アンタは向こう側の廊下を雑巾掛けだよ」

「一発目から！？俺、雑用かよ！？」

「当たり前さ。1日目にお客様の相手をさせるわけにはいかない」

それ、本望だわ。

接客なんてしたくない。

出来るんなら、雑用なんてやりたくないけどやるならそういう方が
良い。

「それに……」

「？」

「その長い髪切るまで、ずっと掃除だ」

はあ！？

待てよ、この髪切れてちよつと――。

「早くしな」

……くそ、なんだよ偉そうに。

何様のつもりなんだよ。こっちは来てやってんだぞ。

さっきも言ったな。まあいいや。

俺は荷物を持って、とつと部屋を後にした。

……あれ？確か他の新人とか言ってたなああの婆。

ちよつどいいや。適当になんか言ってそいつにやらせよう。

更衣室で浴衣みたいなの着て、その上に法被を着るととつと更衣
室から出て、バケツの中に適当にその辺の水道で水入れる。

で、そこに戻ってバケツと雑巾をセット。

さあ、後はその他の新人とやらにやらせればいい。
いやあ流石俺。賢いなあ。

「……」

……なんだ。この胸にチクってくる感じ。

いや、関係あるかよ。俺はめんどくさい事は嫌いだ。したくないんだ。

そうさ、誰が……。

「……」

……やっぱ、やろう。

そうだ、もし婆とかに見つかったらどうする。

めんどくさい事になるに違いない。働くのも嫌だがそれも嫌だ。
よし、ちゃっちゃとやって旅館の中でも見学しよう。

さあ始めよう。雑巾を水の入ったバケツにぶち込んで、それを絞ってさっさと廊下をダッシュ！

だが数秒後、一気にスピードダウン。

体力に自信が無い、というかすっかり無くなった俺はもっとゆっくり廊下を磨く事にした。

が、さっすが旅館。長い。マジで長い。

くそつたれ、こんな事ならやっぱりこんなところ来るんじゃないか……。

もっと違うところで、住み込みの仕事でも探せばよかったんだ。
畜生、なんでもっと気づかなかったんだよ。

と、そんな考え事をしながらしていたせいか。

「イテッ……！」

「いちっ!!」

前から突っ込んできた少女の存在に気付かなかった。

「あ、あの……大丈夫、ですか……?」

大丈夫じゃねえよ……。

どこ見て歩いてんだ!こっちは掃除してんだぞ!気をつけろ!

「こ、こっちだって掃除してたんだよ!」

「……もしかして、今日来たって言う新人?」

いやまあ俺もだけどさ。

そう言つと、目の前のもじやもじや少女は立ち上がりおほんと咳払い。

「松前緒花。今日からここで働く事になりました」

「……ああ、そう。俺もだけどさ」

「え!?!そうなの!?!」

どんだけ驚いてんだよ。

「いやあ、まさか同じ境遇の人に出会えるとは思わなくて!あ、名前は?」

「日高、飛鳥。……ってか、お前別のところの掃除じゃ無かったの？あの婆から聞いたけど」

「ああ、えっと、早く終わって暇になっちゃって……この辺もついでに掃除しようかなあ……みたいな」

「つたく、確認してからしろよ。」

溜息つきながら、痛い頭を抱えて立ち上がる。
と、それと同時だった。

「「！？」」

突如として、何かが俺と松前の手を引っ張りどこかへと連れ去られた。

やがて、小さな小部屋みたいな所に閉じ込められた。

俺たちを連れ去った正体は、この目の前のねーちゃんだった。

「なにすんだよ！びつくりしただろ！！」

「あらごめんなさーい！ねえ、あなたたちが飛鳥くと緒花ちゃん！？」

妙にテンションたけえなあ……このねーちゃん。

目の下にある泣きぼくろが特徴的なねーちゃんが、俺たちに詰め寄る。

「は、はあ……」

松前は圧倒された様で、ただ茫然と生返事をした。

「ねえ緒花ちゃん。皐月さんってどんな人？」

ああ、あの二重人格の？

とか試しにボケてみた。

すると松前は、

「それは『皐』！私のおかーさんだよ」

「へえ、皐って女だったんだ。まあなんとなく乙女っぽかったけど」

「だから違いますッ！」

それはさておき。

とりあえず、アレは『皐』。

松前のお母さんは『皐月』だ。

「すつごく性に乱れてるって聞いたけど、ホント!？」

「その娘にどんな事聞いてんだよ!？」

なんつー事聞いてんだこのねーちゃん。

……つか、アンタ誰よ。

「私は巴。仲居頭をしてるから、あなたたちの先輩に当たるわね。色々教えてあげるから、色々教えてね」

「いったい何を教えるんだよ……」

「そうねえ……まあいい男とか」

「自分で探せよ！俺たちは出会い系サイトじゃねえんだぞ！？」

「まあまあ。それはさておき——」

と、再び肩を掴んで今度はフロントへ連れて行かれた。

壁にこっそり隠れて、玄関を見るように言われたので見ると、そこには高そうな赤い車に乗ったおばさんと腰の低そうなおっさん。

あのおっさん、旅館の法被着てるな……。ここの奴かよ。

「四十万縁さん。ここの番頭よ。で、あっちの女の人は経営コンサルタントらしいんだけど、縁さんすっかり骨抜きにされちゃってだらしないうたら」

あんな化粧濃いおばさんのどこがいいんだよ。

……。あれ、確か四十万って言ってたな。もしかして婆の息子かあの番頭。

「あ、『やつぱり臯月さんも』だらしないの？下半身周りとか」

「え、えっと……」

「アンタそれ軽くセクハラ発言してますよ！？つーか松前も否定しろよ！？」

「その……事実と言えば事実かもしれませんが……」

……。おいおい。

そいや、『やつぱり臯月さんも』ってどういう意味だ？

続いて旅館の裏の方に案内され、ボイラー室の中へ入るジイさんを見せられた。

営繕らしい。名前は豆じいと言つらしい。ちなみに分かんと思うがあだ名だぞ？

本当は助川電六だつてよ。

そして続いきまして、厨房。

手前にいる若いにーちゃんの板前が、宮岸徹。奥にいるあの角刈りのおっさんが富樫蓮二。

今は仕込中だから、後でちゃんと紹介することのこと。別に興味ないけど。

で、次はどこか……と、階段を上ろうとした時。

上から二人の少女が降りて来ようとしてきた。

一人は仲居の格好で、もう1人は厨房の格好だ。

「あ、死ねの人」

「!？」

隣で聞いていた俺は本気で耳を疑った。

なんだよ死ねの人って!?!? どういう意味だよ!?!?

どうやら厨房の格好した女に言ってるみたいだが、どういう意味だよそれ。

「二人とも、16よね？」

なんだ、同い年か。

てつきり中学生かと思つた。

と、それを静かに聞こえない様に呟いたはずだったのだが聞こえて

いたらしく、思いっきり足を踏まれた。
何すんだよ!!

「えっと、民子ちゃんに菜子ちゃん。みんな同じ年って事で、ちょっとこの辺案内してあげて!それじゃあ!」

「お、おい!」

巴のねーちゃんはどっかに行ってしまった。
何やってんだあの人。後輩に全部押し付けたぞ。
で、残された俺たちだが、どうにも空気が重かった。

とりあえず裏口から旅館を出た。
ああ、これからどーすんだよ。
ってか、いつのまにか外は夕方になっていた。

「じゃ、菜子お願い」

「え?み、みんち!」

みんち?

挽き肉?

おかしなあだ名。

そのみんちとか呼ばれた女は、それだけ言い残してぱっぱとどこかへ行ってしまった。

「なんか分かりやすく嫌われてるなあ……」

「お前、何やったんだよ」

「のびるを抜いちゃって……」

「のびるって、あの野菜の？なんで」

「雑草と間違えた」

……溜息。

そんな事で嫌うなよ、あの女、性格悪いなあ。

いや、間違えるこいつも悪いんだろうけど。

つか、フォローしてあげてくださいよ菜子さん。

なんか重苦しい雰囲気のまま、俺たちは高台へと案内された。

にしても、本当に俺たち同世代かよ。そりゃあ俺は男だけどさ。そ
んでもこの雰囲気は重すぎる……。

「えっと、あそこが高校です……」

「どれだよ」

「あそこにみんなちも私も通ってます」

「いやどこですか！？分かんないんですけど!？」

一人マイペースにぼそぼそしゃべるし。

もう、なんなんだよこの女性陣は……。

どいつもこいつもワヤクソだ。

「あ、二人とも、バイト？」

松前がとりあえず話を変えようと話題を振る。
ああ、助かった。

「あ、私は……。みんちは住み込みで」

「そういえば部屋に制服掛けてあったなあ。同部屋なのかなあ？」

「そう、なんじゃないですか……」

……おい、もつとまともに受け答えしてやれよ。

松前もそんな事、絶対思ってるはずだけど必死に話題を色々振り続けた。

「あ、あの制服可愛いよね〜！」

「はあ……」

「色とか結構変わってるし〜！」

「へえ……」

……ねえ、嫌なら嫌ってはつきり言えよ菜子さん。
もうなんかここやだ。

夕日に映り込むカラスの鳴き声が、よく聞こえた。

旅館に帰って部屋に戻りとりあえず一息。

……まあ、部屋と言っても元布団部屋だが。

おかげで埃っぽいし、薄暗いし。もう最悪だ。もっと良い部屋用意しろよ。

「……っーか、なんで俺をこんな所で働かせたんだ、あの糞親父」

なんか、親父はこと関わりでもあんのか？

……分かんねえ。今思えば、おかしい話だったんだ。

親父はただの大手洋菓子専門店の重役だ。家に帰ってこないことだって結構あった。

ったく、何考えてんだ。

引きこもりの息子を働かせる親なんて聞いた事ないぞ。

「……クソ」

んな所、とつとと出てやる。

金貯めてすぐにどっか行ってやるからな。

と、上半身を上げるとふと壁に掛けてある制服が視界に入ってきた。

……うわあ、学ランかよ。前はブレザーだったのに……。

まあ、ほとんど着てねえし、関係ねえか。

……学校か。

行かないと、いけないよなあ。

くそ、面倒だな……俺は仕事を優先させる、とか言えばなんとか——ならねえか。

最悪だなマジ。働きながら勉強とか、頭おかしくなりそうだ。

ますますイライラしてきた。

再び横になって、すっかり暗くなった夜空を窓から見る。

……なあ、亜由美。

俺さ、やっていけないのかな、こんなところで。

すぐ辞めそうだよ。

「……」

……風呂でも、入るか。

再びすっかり疲れ切った重い体を持ち上げて、浴場へと足を運んだ。

風呂はやっぱ旅館だからか、それなりに広かった。

こんな広い風呂を貸し切り出来るなんて、やっぱ旅館の仕事いいかもな。

……な訳あるか。これとまかないの飯が美味いくらいだろ。それ以外何にも面白くねえ。

「……髪、切らないでやろうか」

そうすれば接客しなくていいし、毎日掃除するだけ。
ああ、それでいいかもな。誰が接客なんかするかよ。
……待て、そしたら給料少ないぞきつと。
もらうならやつば多い方が良いやな。
でもなあ……めんどくせえ……。

「……出よう」

こんな大浴場に、なんでひとりだけなんだよ。
面白くないので、俺はとっとと出た。
体を拭いて服に着替え、さっさと明日に備えて寝ようと部屋へと向かう。

その途中だった。

「ああ、飛鳥くん」

巴のねーちゃんだった。

大変だなあ……こんな時間まで。

「何言ってるの。もう帰るわよ、１１時だし」

「……ホントだ」

近くの古時計を見ると、既に短い針は１１を示していた。
いつのまにかこんなに起きてたのかよ。

「で、なんすか」

「女将が呼んでたわよ？ なにかやらかしたの？」

やってねえよ。

少なくとも、身に覚えは無い。

とりあえず女将の部屋へ行ってみる事にした。

「……お菓子をも？ 俺が？」

「そうさ。あんたには、菓子職人として働いてもらふ事にする」

……待てよ。

「誰から聞いたんだよ、俺が菓子作れるって」

「それを聞いてどうする？」

決まってるだろ、今すぐに殴りに行く。

が、既に帰りの金なんか持っていない俺がそんな事出来るわけなかった。

とりあえず口ごもる。やがて婆が

「……まあ、とりあえずそれはまた今度でいいさ」

「……その前に、なんでこんな旅館でお菓子を？」

「決まってるだろう。お客様をおもてなしするためさ。いつまでも市販の菓子じゃあ、満足してもらえないと思ってね」

まあ、そんなもんか。

でも俺は作る気なんてさらさらなかった。

何の為に、そんなことしなければいけない。

……俺はもう、菓子なんか作りたくない。食べるのは別だけど。

「……こんだけかよ」

「あとは、これだ」

そう言い、テーブルの上にあった喜翠荘と後ろに書かれた法被をこちらに手渡す婆。

ああ、確か若旦那の縁とかいうのとか豆爺が着てた奴だ。

「……まあ、いつまでもジャージは嫌だからな」

とりあえず受け取る事にした。

まあ、髪切らないと接客はさせないんだろうが。

「用は済んだ。今日は早く寝るんだね」

「……ハイハイ」

婆の部屋を後にして、ぶらぶらと帰る俺。

部屋に戻り、とりあえず手に持っていた法被をその辺に投げて布団へ転がる。

天井を見ながら、今日一日を振り返った。

いきなり家を追い出され、たどり着いたのは訳のわからない奴ぞろいの旅館。

しかもそこで働け？アホかと思った。

……こんな事なら、たまゝにぐらいでも学校に『顔を出せばよかつ

た』。『行くんじゃないで』。

「…………菓子作り、か」

器具が入ったりリュックサックを見ながら、考え込む。
作りたく…………ない。

作っていると色々思い出して、結局何もしたくなる。

「…………寝よ」

とりあえず、さっさと寝よう。

…………そいや、早く起きろとか言われたな。
くそっ、めんどくさい。

10時起きがデフォルトだった俺にとって、結構つらい事だったが、今日一日久しぶりにしっかり体を動かしたため疲れたのか、いつのまにか瞼は俺の瞳を覆い、眠りについていた。

——うわぁっ！？なんだ！？

「！？」

ぼんやりとした意識が、一気に覚醒した。
突如聞こえた悲鳴に俺は飛び起きた。

何事かと思い、Ｔシャツとジャージの寝巻のまま声が聞こえた外を見るために窓を開ける。

そこにあつた光景は、それはもう変な光景。

「……は？」

布団を被っている客の光景だった。

とりあえず着替えて何があつたのか誰かに聞きに行く事にした。

薄黒色のジーンズとグレーのカッターシャツの上に法被を着て、部屋を出た。

は？服が色々おかしい？知らねえよ！文句なら作者に言え！

と、丁度いいところにえっと……あのマイペースばそばそ女……菜子だったか。

そいつがいたので捕まえる。

「おい！」

「え？あつ、おはようございます……」

そいつは「丁寧に。」

「なんか客が騒いでたけど、なんかあつたのか？」

「その、緒花さんが布団を落としたらしくて……」

布団？落とした？

……ああ、そう言う事か。

「……あいつ、旅館の仕事向いてないんじゃないか」

「え？どうしてですか？」

「何で布団落としたのか知らねえけど、どーせ干そうとしたんだろ。……客の通る表側で」

「あつ……」

「ったく、もつとあいつも考えるよな……バカじゃねえのか」

そう思いながら、俺はあくびしながらその場を後にした。

まあ、間違っちゃないんだろうけど。

他人他人他人……バカの一つ覚えみたいに。

どーせ最終的には自分優先なんだよ何事も。

よくもまあ、接客仕事の奴らって他人の事を考えれるよな。

今頃、あの婆に怒られてんだろうな。

……やる事ないし、見に行くか。

女将の部屋の前に行くと、巴のねーちゃんと性格悪い女……みんなちだっけか。

その二人が正座して、みんなの方が部屋に入って行った。

部屋の中には、松前と女将が正座して互いに向かい合っていた。
俺はとりあえず巴のねーちゃんの後ろでその風景を眺める事にした。
そして、俺は度肝を抜かれた。

パシンッ

みんなが女将の前に正座した途端、頬を叩いたのだ。
あの響き……相変わらず嫌な音だよ。
……じゃねえ、なんで叩くんだよ!?

「アンタの布団を干すために、こいつはお客様に失礼したんだとさ。
自分の身の回りぐらい自分で管理できないでどうするんだ」

……そう言う事が。

松前は自分の布団じゃ無くて、あいつの布団を干したんだ。

「すみません……」

「おばーちゃん!あんまりだよ!」

「呼び方が違う」

おばーちゃん……?

まさか、あいつらそんな関係だったのか?

「女将さん!悪いのは私じゃないですか。理不尽です」

「お客様がこんなふうに叩かれたらどう思う？理不尽なんて騒ぎじゃないね。アンタはそれをしたんだ」

「ッ……」

「お客様を第一に考える。それが出来なきゃ、ここにいる資格はない」

「……分かりました。でも、私も叩いてください」

……本気で、松前はバカだと思った。
自分から叩かれるとか……。

マジでバカだろ、こいつ。

そして次の瞬間、婆の三連続ビンタする音が耳に響いた。

「ありがとうございましたっ！！」

裏庭掃除。

枯れた葉っぱなどをホウキでかき集めるだけだが、これがもう面白くない。

くそ！もつと別の仕事させろよ、味見とか味見とか味見とか。

「……バカだよなあ」

あの時の出来事が、未だに頭の中でリピートされ続けていた。

なんで、自分から叩かれようとしたんだ？

理不尽だから？別にいいだろ。

……訳分かんねえ。

それがかっこいいとでも思ってたのか？だとしたらもっとバカだあいつ。

「……………」

俺、これからどーなるんだろうなあ。

こんな癖の強い面々と、これからの日々を過ごすのかよ。

本当に、やってけんのかな、俺……？

recipe1「女の子の類は簡単に叩くな」(後書き)

エンディングテーマ(2話からOP)

『カルマ』歌：BUMP OF CHICKEN

ゲーム『テイルズオブジァビス』OPテーマ

伝説

「とりあえず、お前サイテーだな」

飛鳥

「お前が考えた性格だろ！俺は悪くねえっ！」

伝説

「……まあ、成長する事を祈ろう」

飛鳥

「絶対成長なんかしてやらねえからな！！」

次回予告

recipe2『推理小説は伏線まみれ』

recipe 2 「推理小説は伏線まみれ」 (前書き)

伝説

「一つ聞くぞ」

飛鳥

「なんだよ？」

伝説

「お前、主人公？」

飛鳥

「見れば分かんذار」

伝説

「いや、この話見た後、絶対に読者の皆さんはお前の事嫌うはずだ」

飛鳥

「な訳あるかよ」

伝説

「そして次回を見れば100人中100人の方が嫌うな」

飛鳥

「は、それってどういう意味——」

始まります

オープニングテーマ

「カルマ」

TVゲーム『テイルズオブジァビス』OPテーマ

飛鳥

「おいっ!!」

recipe2「推理小説は伏線まみれ」

——さすがあーちゃん！天才だね！

——言つたろ？俺は世界一のパティシエになるって。これぐらい当然だよ！

——じゃあじゃあ、世界一のパティシエになって自分のお店持った時は……。

——も、持った時は……？

——私……。

——……。

「んあ……？」

目が覚めると、相変わらず古臭い木製の天井が目につく。

……ああ、そつか。もう俺の家じゃないんだよな。

つたく、もつといい部屋に住めねえかな……こんなカビ臭くて狭い部屋なんかいたら気が滅入るよ。

とりあえず起きねえと。……まあ、どーせ掃除なんだろうけど。

いつもの様に薄黒色のジーンズとグレーのカッターシャツの上に法被を着る。

にしても、何時だろ……？

黒色のスマートフォンの電源を入れると、5時47分と表示されていた。

……もっかい寝ても怒られないか。

いや、起きねえとだめだよな……。

まだ眠気が完全に抜けてない頭を掻きながらスマートフォンをズボンのポケットに入れて、部屋を出た。

「あ、日高くん！おはよっ！！」

「朝からうつせえんだよ。もっと声のトーン下げろ」

とりあえずフロントに行くと、そこには松前と菜子さん——ああ、確か押水だったか。

二人が並んでどこかへ行こうとしていた。

「ちょうどよかった！女将さんが呼んでたよ！」

俺のさっきの注意を丸々無視かよこの女。

溜息つきながら、俺はこの二人に着いて行く事にした。
で、婆の部屋に着くと早速一言。

「仲居の仕事は先輩が教える。と言う訳で菜子、二人の教育係を頼む」

「……俺、女じゃねーぞ」

「アンタは掃除の仕方教えてもらいな。あんな雑なやり方じゃあ、いくらしても綺麗になりやしない」

うつせえ、掃除なんか嫌いだ。

くそ、こっちはしてやってんだぞ？なんで文句言われなきゃいけないんだよ。

しかもこのぼそぼそ女に教えてもらうのかよ。

何を教えてもらうんだよ、いったい。むしろ俺の方が教えられるだろ。色々不満だったが、文句を言うめんどくさそうなので大人しく従う事にした。

209、桐の間。

掃除道具を積んだワゴンを押しながらようやくたどり着いた。あゝ

あ、めんどくせー。

押水がドアを開けて、部屋の中に入ろうとした。

と、俺はここである事を思い出した。

この部屋、和室だったよな……？

——和室の襖の敷居を踏んじやいけないんだって。この前テレビでやってたんだゝ

……ああ、そうだ。

「おい、松前。敷居踏むなよ」

「へ？」

だが遅かった。

既にこいつは踏んでいた。

「……バーカ」

そうこうしながらも、桐の間の掃除を終える事が出来た。
布団シーツをビニールのワゴンにぶち込んで完了。

あゝあ、めんどくせー……。こんなのがあと何個残ってたんだよ？

「次はどこ掃除だっけ？」

「えっと、波の間……だけど……」

波の間？ああ、この隣か。

でも『だけど』って？

と、その続きを聞こうとした瞬間だった。

『菜子ちゃん！ちょっと手伝ってー！！』

巴のねーちゃんの押水に助けを求める声だった。
今は無理だろ。俺たちに教育してんだじか――。

「ちょ、ちよつと行つてきます……」

「行つてきますつて、ここどーすんだよ!？」

その言葉を見殺したのか聞こえなかったのかめんどくさかったのか。
押水はそのまま巴のねーちゃんの方へ行つてしまった。
残された俺と松前は、ただ寂しくその場に立ち往生していた。

「……他人に頼らず、自分を信じる……」

「えっ……?」

ワゴンをつつきながら、松前がそう呟いた。

「あ、ううん、マ――お、お母さんが言つてたんだ」

「……ふん。俺には無理だなあ」

「え、なんで?」

「自分なんて信じたくねえし、他人なんて頼られてなんぼだと思つてゐるからな」

それを聞いて、松前は明らかに動揺していた。

目を大きく開けて、かなり驚いた様子だった。

「自分を信じないって……」

「……嫌いなんだよ、自分が」

——あーちゃんの、ケーキ……。もっと……食べたかったなあ……。

「……んな事より、どーすんだよ波の間」

「ああ、うん……。とりあえず、やるだけやる?」

本当はもう半分ぐらいやる気を失っていたが、これじゃあ給料が減りそうなのでやる事にした。

が、ドアをノックするが反応なし。

部屋に入ると、もぬけの殻……。ではなかった。

人影は無かったが、部屋は異常なほど散らかっていた。

「流石人気小説家……」

「小説家?」

「うん。確か次郎丸太郎さん……だったかな。私は知らないけど、結構有名なんだって」

ふん……。

まあ、本にはほとんど縁のない俺にはどうでもよかった。なんにしろ、この散らかしような異常だろ。

くそ、片づける方の事も考えろよな。

イライラしながら、床に散らばっている原稿らしき紙を拾い集める。つか、これいいのか捨てても。

……いいよな、別に。床に捨てる方が悪い。俺はゴミ袋へと全部ポーンした。

「悩んでるのかな、この人……」

「はあ？」

掃除していると急に松前が独り言のように呟いてた。

何を悩んでんだよ、こんだけ散らかして好き放題してむしろこっちが悩んでんぞ。

「まあ、小説のネタでも切れたんだろ。だからこうやって缶詰でもしてんじゃねーの？」

「そうなのかなあ。偉い人も悩む……かあ」

悩むか……。

確かに俺も悩んでるな。

なんでこんな仕事を。めんどくせーのに。

まあ、これは悩みと言つか強制だからな。くそ、嫌な強制だ。

と、そんな事考えながらしてるうちにいつの間にか終わってしまっ

ていた。

いやあ、なんだか楽しかったな。

ゴミ袋を廊下の片隅に置くと、同時に押水が帰って来た。

「あ、菜子さん！掃除とりあえず終わりました！次は何したらいいですか？」

「えっと、次は……ありません。今朝はこれで終了です……。その、お疲れさまでした」

え！？終わり！？

ヨッシャー！さあ、休憩休憩！

押水はシーツの代えみたいなものを持ってどこかへと去った。

「んじゃ松前。これよろし——」

「……」

「……やるよ！やればいいんだろチクショ——！！」

くそ、休憩させろよ！！

『もつとしつかりしろよ！』

「は、はい！すみません！！」

どこからか聞こえた怒声に、松前がすみませんとか言う。

……いや、お前じゃないだろ明らかに。別の奴だろ。

怒声が聞こえたのは厨房からだった。

俺たちはこっそりと覗いてみる。

「どーすんだよ、焼き物全部焦がしちゃって……こんなもんお客に出せないだろ」

「すみません!!」

なんだよあいつ偉そうに……。

と思いきや、怒られてるのはあの性格悪い死ねの女だった。

なぐんだ、あいつか。へへ、ざまーみやがれ！俺にあんな態度取るから罰があたつたんだ！いい気味だ。

さーて、なんか気分も良くなったしさっさとゴミでも捨ててその辺ぶらぶらしよーっと。

「あの、今朝のまかないは……」

「後回しだ。まかないなんて作ってる暇はねえ」

……げ、朝飯なしだよ！

冗談じゃねえよ！こっちは腹減って死にそうなんだぞ！

くそ、あの女のせいだ……！絶対に許さねえ……！！

「……うゝむ」

「なんだよ？」

なんとも微妙な表情をしている松前。

おいおい、まさかの殴りこみか？

と思いきや、方向転換して厨房裏の食堂へと向かい、扉を開けて再び、

「……うゝむ」

「……なんだよさつきから」

テーブルに置いてある食材とにらめっこする松前。

……料理、作れるのかよ？

「うん。お母さんメチャクチャだから、幼稚園の頃から料理作らせてたんだ」

「へ」。……幼稚園の頃からねえ」

いったいこいつの母さんってどんな人なんだよ。

なんか色々ヤバそうな人に思えてきた。いや、そうなんだろうけど。

「……よし！民子さんフォロー作戦をしよう！！」

「フォロー作戦？あんな奴フォローなんてしなくてもいいだろ」

「これからずっといつしよに働くのに、仲悪いままじゃあ……ね？」

俺は嫌だな。

あんな性格悪い女なんかと、なんで仲良くしなきゃいけないんだ。そもそも、フォロー作戦って意味分かんねえし。

「民子さんは今、まかないが作れなくて困ってるんだよ」

「まあ、そうだろうな」

「だから私がここでまかないを作る！」

「で？」

「きっと民子さんはこう思う！」

『緒花さん……あたしのために……？今までなんて失礼な態度を取ってたんだろう……これからは仲良くしてあげよう！』

……みたいな？」

そんな簡単にいくかよ。

あの女が、そうホイホイ引つかかるようには思えないけど。

「なんか、随分嫌ってるんだね。民子さんの事」

「いきなり死ねって言われてんのに、そこまでする義理が分かんないだけだよ。まあ、嫌いっちゃ嫌いだけど。

まあ頑張れよ。俺は休憩するから」

そう言っただけで食堂を後にした。

料理？飯に作れても手伝うかよ。めんどくせー。

やりたい奴にやらせばいいんだ。知ったこっちゃねえ。

「あゝあ……ホントバカだあいつ」

どいつもこいつもバカばかり。

こんな所で俺やってけんのかな……。

そろそろまかないができる頃か。

旅館内をぶらぶらしていた俺は再び食堂へと帰った。

ちようどみんな集まったところの様だ。1人ずつ席へ着いて食事をしている最中だった。

と、番頭の縁……だっけ？あの人と目が合って、

「ああ、日高君。どこ行つてたんだよ？」

「ちよつと裏を掃除してました」

適当にごまかしながら開いてる席へ着いた。

箸を取って、早速試しに味噌汁を口に運んだ。

「……うめ」

驚いた。

伊達に幼稚園から料理してるわけじゃないみたいだ。

「お前のより美味いんじゃないの？」

「！」

と、ここで徹のにーちゃんが性悪女にそんな事を言った。
その瞬間、性悪女はムツとした表情で立ち上がった。

「……仕入れの様子、見えます」

「み、民子さん！」

松前は裏へと行った女の後を追った。

……とことんめんどくさい女だな。冗談に決まってるんだろ。が、俺は着いて行ってしまった。

なんで？めんどくさそうな事になりそうだから？

……おお、そうだ。めんどくさい事になれば俺にまで迷惑がかかるからな。

松前とは基本、セットで扱われるんだから機嫌が悪くなれば俺がめんどくさい事になる。

そう結論付け、二人の後を追った。

「民子さん！」

「出しゃばるな！！」

そしてそれが二人の姿が見えた瞬間に聞こえた言葉。
出しゃばるな……。

「あのまかない、あたしへの当てつけ？」

「ち、違うよ。民子さんには布団の事で迷惑をかけたし……」

「で、また迷惑かけた訳だ」

……カチン。

ちよつと流石にイラって来た。

そろそろその辺にしとけよ、性悪女。

「ありがた迷惑」

「ちょ、何それ——「いい加減にしろよ!!」ひ、日高君!？」

もう我慢の限界だった。

俺は松前に詰め寄る性悪女と松前を引き離し、間に割って入った。

「なんだよさつきから偉そうに!素直に感謝しろよ!ありがとうの
ひとつも言えねえのか!!」

「何よ!邪魔しないで!」

「うるさいっ!死ねやらありがた迷惑やら、よくもまあな事をず
けずけ言えるよなお前!」

女は唇をかみしめて黙っていた。
俺は更に追撃を加えた。

「お前みたいな奴は、美味しい飯なんて一生作れねえよ。さつき言わ
れたの、やっぱ本当の事だな!はははっ、ざまあみろってんだ!」

「ッ……………!!」

パチン

「!？」

「死ねっ！」

そのままどこかへどこか歩いて去って行った。
俺はそんな様子を、痛い右頬をおさえたままぼつぜん見つめるしかなかった。

「……死ねとか、簡単に言うんじゃねえよ……」

未だに、あいつへの怒りは収まっていなかったが。
後ろを見ると、松前も力が抜けてその場にへたりこんでいた。

「……大丈夫？」

「いてえに決まってるだろ。くそ、女将に言いつけてクビにしてやつからなあ女……」

本気でそう思った。
その次の瞬間。

『女将を呼べえ!!』

どこかで聞いたようなセリフが、耳に届いた。

recette2「推理小説は伏線まみれ」（後書き）

次回

recette3「恋愛小説はラブまみれ」

エンディングテーマ

「バランスドール」

アニメ『銀魂』EDテーマ

伝説

「みんながボコボコに言われてますが、作者はみんなが嫌いなわけではないです」

飛鳥

「……俺は大っ嫌いだけど」

伝説

「誰も聞いてねえよクソ主人公！死ねっ！」

飛鳥

「簡単に死ねっって言な！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8463x/>

花咲くいろは-My Hands Future-

2011年11月12日15時59分発行